



横浜みなとみらいホール
ミュージック・イン・ザ・ダーク®
～闇に響く音～

事業報告書

2026年4月

横浜みなとみらいホール(公益財団法人 横浜市芸術文化振興財団)

令和7(2025)年度：2026年2月実施

公演名：ミュージック・イン・ザ・ダーク® 闇に響く音
日時：2026年2月7日(土) 15:00 開演(14:15 開場)
開場：横浜みなとみらいホール 小ホール

料金：全席指定 一般 4,000 円
学生・65歳以上の方 3,500 円
高校生以下 3,000 円
◆障がい者手帳等※をお持ちの方 3,500 円
◆ペア券(障がい者手帳等※をお持ちの方と介助者1名の並び席)
7,000 円
(◆横浜みなとみらいホールチケットセンター電話・窓口のみ取扱い)
※対象の手帳：身体障害者手帳、精神障害者保険福祉手帳、療育手帳



出演：藤原道山(尺八)
澤村祐司(箏)
神田佳子(パーカッション)
風雅竹韻(尺八アンサンブル)：柴 香山、田辺恵山、風間禅寿、村澤寶山
小汐唯菜(ソプラノ)

曲目：公演冒頭レクチャー(館長 新井鷗子)
プログラム本編開始前に司会者が、ホールの舞台の広さと形状について、生の声と楽器の音の響きで説明。客席の四隅には竹製の民族楽器アングルンを持った学生(東京藝術大学学生)が立ち、順番に音を出して会場の広さを響きで伝える。

アメイジンググレイス
宮城道雄：春の海
宮城道雄：ロンドンの夜の雨
流祖 中尾都山：鶴の巣籠(すごもり)
三宅一徳：渦龍(かりゅう)の舞
小林愛雄 作詞、宮城道雄作曲：紅薔薇(べにそうび)
神田佳子：尺八はミラクル
藤原道山作曲、冷水乃栄流編曲：東風(こち)
山田耕筰作曲、加藤昌則編曲：山田耕筰メドレー
からたちの花～この道～待ちぼうけ～あわて床屋～ペチカ
アンコール 成田為三作曲、加藤昌則編曲：浜辺の歌

主催：横浜みなとみらいホール(公益財団法人 横浜市芸術文化振興財団)
協力：東京藝術大学、横浜能楽堂
助成：文化庁文化芸術振興費補助金(劇場・音楽堂等機能強化推進事業[地域の中核劇場・音楽堂等活性化事業]) | 独立行政法人日本芸術文化振興会
神奈川県マグカル展開促進補助金

公演入場者数：386 名(うち招待 71 名)
・障がい者手帳等をお持ちの方及びペア券での入場者 38 名
・盲導犬 3 頭



撮影：藤本史昭

【鑑賞サポート】

音声コード付きチラシ

点字チラシ(基本情報)

音声コード入りプログラム

点字プログラム

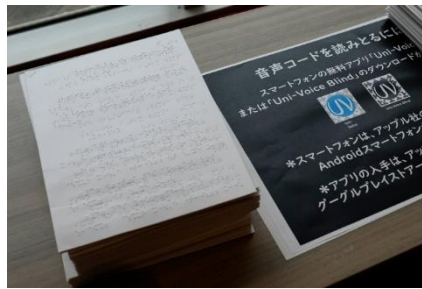
大文字プログラム(白背景、黒背景)

レーザー網膜投影機器「レティッサオンハンド」(当公演初設置、貸出台数 5 台)

公演プログラムの音声読み上げ動画(当日ロビーに設置)



大文字プログラム(白背景、黒背景)



点字プログラム 音声コード入りプログラム



公演プログラムの音声読み上げ動画



レーザー網膜投影機器「レティッサオンハンド」

撮影：藤本史昭

■視覚に障がいのあるお客様のための「鑑賞ガイド 宮城道雄と海」開催

- ・尺八の説明、箏の説明。
- ・宮城道雄「春の海」抜粋演奏と曲解説。
- ・打楽器の演奏体験、ならびに「海の音」を共に奏でるワークショップを実施。

2月7日(土)14:00～14:25(13:30 受付開始)

会場：横浜みなとみらいホール レセプションルーム

*東京藝術大学 演奏芸術センター授業「障がいとアーツ研究」受講生制作・運営

・鑑賞ガイド入場者数：参加者 17名

内訳：当事者参加者17人(盲導犬2頭、レティッサ使用2名)、付添者13人、見学者20人



撮影：藤本史昭

■「視覚障がいがある方へのサポート」レクチャー(職員向け研修)

事業開催にあたり、視覚障がいの方へのサポートについての基礎知識について学ぶ機会を、当事者の家族を講師に迎え、部署横断で実施。

9月19日(金)14:00～15:00

会場：横浜みなとみらいホール レセプションルーム

参加者：横浜みなとみらいホールスタッフ 16名、横浜能楽堂スタッフ 1名

講師：町田 有規

【一般来場者アンケートより】回収枚数：21枚 (WEB回答：17) 抜粋

<公演について>

- 趣旨もよいし、演奏がすばらしかったです。暗い中で音が降ってくる感覚はすてきでした。
- ほかの演奏会よりも音に集中できたと思います。和楽器っていいなと感じました。
- 会場が暗闇になると一層他の感覚の感度が上がり、新鮮でした。その暗闇の中で、小汐さんのまっすぐな清廉な声が会場に沁みわたってゆき、感動的でした。

- 暗闇で聴く音楽は全身で聴いている気がしました。貴重な体験をありがとうございました。
- 暗闇で何もみえない状態を体験することは中々ないので、新しい感覚でした。逆に音に集中して聴くと音色の響きや方向などを感じられて興味深い体験となりました。いかに普段のコンサートでは目で観ている情報に依存しているかを感じました。
- 暗闇の中で… 盲目の方々の想いや感触をホンの少しだけとは思いますが… 体験出来て良かったです。
- 点字だけでなく、拡大文字白黒反転プログラムが予約無しで手に入るのが大変ありがたく、点字を使わない視覚障がい者もいるということも踏まえてご用意くださっていることが伝わりました。
- 生音の響きでホールの大さを説明するデモンストレーションでは、自分が晴眼者であるから得られている情報に無自覚であることに気付かされました。
- 照明が落とされ、見えないものが見えてくるのが分かりました。具体的には、暗闇の中だと音を立体的にイメージすることができ、激しい音やこもった音などを形として感じることができました。
- 目を開けている時とつぶっている時の感覚がほぼ変わらない「本当の暗闇」を体験できたことにも驚いております。友人も「これなら目の不自由な人でも一緒に楽しみやすいね」と喜んでおりました。
- 電話予約時から当日の鑑賞サポートに至るまであらゆる手段でアクセシビリティの確保にご尽力くださっているのを、視覚障がい者の家族として、一連の流れで実感いたしました。
- 事前に希望を募り、当日時間を決めて最寄り駅への往復の送迎サポートがあるとよい。また、紙面のQRコードを撮影することが困難なので、アンケートのリンクをHPに載せてほしい。(視覚障がいのある来場者)
- 視覚障がいのある私が、みなさんと同じ立ち位置で音楽を聴くことに驚きがあり、より集中して聞けて楽しかった。(視覚障がいのある来場者)(朝日新聞 2026年2月20日[金]かながわ版 23面より)
- こうしたコンサートをまた開いてほしい。(視覚障がいの方の同伴者)「同上より」
- 自分はいつ暗くなっているのかわからないが、いつもより観客席が静かで、演奏に集中して聴いていることがわかった。(全盲の来場者)

<鑑賞ガイドについて>

- 楽しいワークショップでした！参加者全員で合奏できてワクワクしました。関わってくださった皆様ありがとうございました。(全盲の来場者)
- ワークショップから開演前の会場の広さの説明など、視覚障がい者でもわかりやすい説明と配慮がされておりありがたかったです。(視覚障がいのある来場者)
- 目を開けている時とつぶっている時の感覚がほぼ変わらない「本当の暗闇」を体験できたことにも驚いております。(視覚障がいのある来場者)

【演奏者(視覚障がい当事者)アンケートより】

- 常時アテンドの方についていただけたことで、安心してリハーサルや本番に集中することができた。丁寧な曲目解説などの細やかなバックアップがあったことで、全力で演奏に集中できた。素晴らしい響きの空間で無事に演奏を終えたことが大きな自信に繋がり、今後もさらに多様な経験を積み重ねていきたい。(出演者:小汐唯菜)
- 福祉的な視点に留まらず、演目を含む「質の高い音楽作品」として音作りに参加できた。視覚障がい者に「何かをしてあげる」という上から目線ではなく、暗闇という共通空間で純粋に音楽の素晴らしさを届けるというコンセプトが、出演者・観客の双方に正しく伝わっていることに深い意義を感じた。(出演者:澤村祐司)

【東京藝術大学学生(鑑賞ガイド対応)アンケートより】

- 最後の「春の海」の合奏では、まさに春ののどかな海を見ているような、音で景色を聴く感動的な体験となりました。
- 尺度や数値を用いて言葉だけで世界を構築していく感覚は、私にとって非常に新鮮でした。納得のいく言葉で描写できたと感じた瞬間は、まるで絵を描き上げたときのような喜びを感じました。
- 実際にガイドを経験したことで、自分の制作物もまた、多様な人々の目に触れる可能性があるのだと気づかされました。

- ワークショップ参加者との合奏は思っていた何倍も上手く行った様に感じます。楽器説明と情景説明が上手く伝わったのか、皆さん各々曲に合わせた音を出していただくことができ、感動しました。
- 制作物を展示することのみならず、その場でどのように説明するか、鑑賞者の想像や会話が広がるようなコミュニケーションをとるためにはどんな言葉が必要なのか、セットで考えなければならない事に気付きました。
- 視覚障がいの方が、楽器を触って音を聴いた瞬間に、あ、これは波だ、これは風だ、とすぐにわかっているやっやっやっ、やはり視覚の代わりに他の聴覚などが優れているのかなと思いました。
- 普段の演奏会やワークショップが、いかに目が見える前提で行なっているのか、説明や席の配置など、初めて気づきました。道山先生が毎回衣装について言及していたのが印象的でした。
- 普段どうしても自分の見えるもの、容易に考えつくことの範囲で物事を判断してしまいがちな中、このような経験で、自分の想像力を超えてゆく筋力が鍛えられたように感じます。
- 自分の視力だと眼鏡をかけても道山先生の袴が縞模様だったりすることが見えないので、視覚障がい者向けの解説に晴眼者の自分も助けられました。
- 集団といってもそこには一対一のコミュニケーションが必ず根底にあり、それが複数集まったものなのだと考えることで意識が変わり、少し楽になると感じました。これは確実に今後社会で生きていく上での大きな糧となったと思います。
- 視覚情報に頼れない状況下で、ジェスチャーを排し「クロックポジション(時計の文字盤に見立てた位置説明)」や具体的な数値・尺度を用いて言葉だけで世界を再構築する「伝える技術」の面白さと難しさを実感しています。
- 美術学部の学生を中心に制作した「箏人形」や楽器のミニチュアが、演奏者の姿や動きを伝える触覚的な手段として予想以上の歓声で迎えられたことは、触覚による情報保障の有効性を確信する機会となった。
- 視覚障がい当事者との合奏を通じて、参加者が音の方向や音色を瞬時に捉えて反応する鋭い感性に驚き、障がいの有無を超えて繋がれる音楽の力を再認識した。
- 支援のあり方についても、一方的な手助けではなく、まず「何か必要ですか？」と問いかけ、相手のニーズを確認する一対一のコミュニケーションの重要性を学んだ。

担当者振り返り

チケットセンターのスタッフとして、盲導犬の近くで、実際に公演を鑑賞しました。盲導犬は想定以上にサイズが大きく、小ホールの一般的な7列の座席では、一席分の足元スペースには到底収まりきらないことが判明しました。盲導犬の顔や体が隣席にはみ出したりすることで、同列の他のお客様が反対側の通路へ遠回りを強いられるなど、移動の制約が発生しました。また、ユーザー自身も、一度着席すると休憩中に席を立つことが非常に困難な様子が見受けられます。これらの知見を踏まえ、今後の盲導犬ユーザーへの配席については、足元に十分なスペースが確保できる最前列(1列)または中通路に面する余裕のある列(9列)を優先的に案内することを標準的なルールとすべきであると提言いたします。

また、障がい者ペア席を同列の両端に設定すると、中央に座るお客様が「挟まれて出にくい」と感じる場面もあるため、配席の組み合わせにも一層の配慮が必要です。

チケットセンター スタッフ

本企画の立ち上げから10年目の節目を満席で迎えることができた。ホワイエでの網膜投影機の貸出や、音声読み上げプログラムの提供など、当館が積み上げてきた鑑賞サポートを細部まで反映させた。運営面では、アテンド講師の井上誠剛による研修を受けたスタッフ、福井県立音楽堂の職員、インターン生が連携し、視覚障がいのある来場者や出演者への丁寧な誘導体制を構築できたことは大きな成果であった。

制作過程においては、前任者からの引き継ぎ後の業務管理に不備があり、連絡漏れやスケジュールの遅延を多発させてしまったことを深く反省している。特に全盲の奏者である澤村に対し、長尺の編曲作品(山田耕筰メドレー)の事前リハーサル回数を前回より削減したことや、編曲者の立ち会いの設定ができず、演奏の完成度および奏者の心理的負担を考慮する上で大きな課題となった。

一部の来場者から「暗闇でなくてもよかったのではないか」という意見をいただいたことを真摯に受け止め、今後は「暗闇の中で生の音楽を楽しむ」という本公演のコンセプトをより明確に打ち出す必要がある。奏者の暗譜を前提とした演出構成や、共演奏者の協力を得たりリハーサル環境の充実など、今回の経験を糧に制作フローを再構築し、公共ホールとしてのインクルーシブ事業の質をさらに高めていきたい。

公演担当

企画グループ 担当リーダー 中村康裕

当館では2年ぶりの開催となる「ミュージック・イン・ザ・ダーク®」の実施にあたり、初めて関わる職員も多かったため、支援団体・関係者との関係性の再構築や、職員の意識醸成から着手した。

本開催では、過去の公演で実施した支援ツールの継続に加え、東京藝術大学の学生との鑑賞ガイドの協働とともに、当事者家族を講師に迎えた部署横断での研修や、横浜能楽堂との財団内の知見共有等、初の試みもあった。また、福井県文化振興事業団のインクルーシブ研修の監修を請け負い、当館の経験を他地域に広げていくという大役も担い、担当職員にとっては、年間を通じた学び直しの機会にもなった。

どれだけ準備を重ねても、当日問われるのは、ひとくりにされた「障がい者」ではなく、「ひとり」と向き合っているかという点である。互いを思いやる気持ちや想像力が、相手に安心感をもたらし、信頼を生む。公演の来場者からは改善のご指摘もいただいたが、それらの多くは感謝の気持ちと共に届けられたものであった。本公演に集ったお客様・出演者・スタッフのそれぞれが、少しの優しさをもって「一時」を共有できたのであれば、公共ホールとしてこんなにも嬉しいことはない。

(補足)

公演制作全体を通じては、事業の立ち上げ時から協力会社の1002が制作を主として担っていたこともあり、公演制作に於けるノウハウの継承が十分ではないと感じた。今後の課題である。

鑑賞ガイド・サポートツール担当
事業企画グループ長 藤井聡子

邦楽器による「ミュージック・イン・ザ・ダーク®」は、横浜みなとみらいホールの休館期間中の2021年に横浜能楽堂を会場に開催して以来の取り組みとなった。今回は広報でも協力を得た横浜能楽堂が休館のため、横浜みなとみらいホールのお客様中心の告知でどうなるのか、若干の心配をしていたが、券売は発売開始より好調で、満員の企画となった。暗闇で本格的な音楽を聴く感動を、記憶している人が増えていることを示している。

また「ミュージック・イン・ザ・ダーク®」では、初の網膜投影机やプログラム読み上げるためのモニター設置は、会場の雰囲気として、視覚障がいの方との共生を実感させる心温まる空間ともなった。(ただし、屋外は雪でしたが…)

一方、アーティストの希望を繊細に確認しながら進めないといけない「ミュージック・イン・ザ・ダーク®」という企画において、会館が全体の制作を担ったことで、全体的な進行の遅れと、準備の漏れがあったことは、大変な反省点だった。演奏家や演出家などの協力のおかげで無事に終了したが、両者に負荷をかけてしまって、その責任者として申し訳なく思っている。外部の事業者の協力は必須だと改めて感じる機会となった。

この反省を踏まえて、これからも制作担当を担うであろう株式会社1002との進行を、さらに協力して組めるように感じており、今後前向きに活かしていきたいと考えている。

これからも、より広範な地域で、「ミュージック・イン・ザ・ダーク®」ならではの感動を届けられるように努めていきたい。

事業統括
事業企画グループ チーフプロデューサー 菊地健一

本企画の立ち上げから10年目、第10回の節目を満席の横浜みなとみらいホールで成功裡に終えることができた。ホールが積み上げてきたインクルーシブ事業の知見が細部に活かされ、鑑賞サポートの丁寧な設備から主旨にふさわしいプログラムまで、視覚障がいの有無を超えてコンサートとしての高い芸術性を追求できたことは特筆すべき成果である。また的確な広報方法により、視覚障がいのある来場者を多く迎えることができた。制作体制については課題も残ったが、ホールスタッフの多大な尽力に心から感謝したい。

邦楽器のアンサンブルとしてはシリーズ2度目の開催となり、今回は能楽堂という場の特殊性がまず目立ってしまったが、今回はコンサートホールでの開催により、音楽そのものの普遍性が一層高まった。歴史的に邦楽器奏者には視覚障がい者が多いことから、邦楽と「ミュージック・イン・ザ・ダーク®」の親和性は高く、暗譜で演奏することにも抵抗が少ない。今回、編成にパーカッションが加わったことでプログラムの幅も広がり、良質のエンターテインメント性を確保することができた。

照明の暗転明転の変化においては、曲想や歌詞の意味に合わせて秒単位で調整され、効果的な演出となった。やはり福祉的な意義や社会包摂の目的だけでは、コンサートホールが主催するイベントとして持続不可能であり、いかに音楽的な満足度、芸術の革新性を盛り込めるかに継続の鍵がある。本企画を、賛否両論ありつつも続けることができたのは、「暗闇の中で生の音楽を楽しむ」という稀有の、珍奇ともいえる体験が提供できているからだと思う。

ただし矛盾するようであるが、インクルーシブ事業が「イベント化」することによって当事者の日常が置き去りにされてしまう危険もある。コンサート制作に携わる我々としては、イベントとしての達成感のみに終始してしまわないよう、常に事業のプロセスを濃やかに振り返ることを怠らないようにしたい。

「ミュージック・イン・ザ・ダーク®」企画
横浜みなとみらいホール 館長 新井鷗子

関連事業

2025 年度に福井県文化振興事業団の主催した「インクルーシブ研修プログラム」の事業監修を、横浜みなとみらいホールが行った。

「すべての人が楽しめる文化芸術イベントの運営について学ぶ」をテーマに、年間を通じて社会包摂事業を学ぶプログラムにおいて、プログラム監修および、以下 5 事業の講師を担当。福井県文化振興事業団職員や、一般参加者の県民に向け横浜みなとみらいホールの蓄積したノウハウの共有を行った。

【座学】インクルーシブ概論(第 1 回)

講座開講にあたり、インクルーシブなコンサートの制作法など、芸術を通して誰もが社会に参加できる仕組みづくりについて講義を行った。同財団職員や本研修の研修生に加え、一般聴講生も参加した。

日時 : 2025年6月13日(金) 10:00~12:00
会場 : ハーモニーホールふくい 小ホール
講師 : 館長 新井鷗子
参加者数: 74 名(一般来場者含む)

【座学/実践】インクルーシブなコンサートのつくり方(ワークショップ) (第3回)

同財団職員、研修生、越のルビーアーティスト(ハーモニーホールふくい登録アーティスト)および、協力者(視覚障がい当事者)を対象に、インクルーシブコンサートの事業紹介および、「ミュージック・イン・ザ・ダーク®」をテーマとした制作について、座学とワークショップ形式にて開催。

チラシやプログラムの制作での情報保障などをテーマに、「視覚障がいの方の立場に立った公演づくり」を、当事者の方々とグループディスカッションにて意見を交わし、考えを発表した。

日時 : 2025年8月28日(木) 13:30~16:30
会場 : ハーモニーホールふくい リハーサル室
講師 : 館長 新井鷗子、事業企画グループ長 藤井聡子
参加者数: 30 名(協力者(視覚障がい当事者)含む)

【実践】アテンド&ユニバーサルマナー研修(第 6 回)

横浜みなとみらいホールを会場に、レセプションистによるさまざまなお客様への対応と、視覚障がいの専門家からによる基本アテンド研修を、ハーモニーホールふくいの職員を対象に行った。

日時 : 2025年11月7日(金) 10:00~12:00
会場 : 横浜みなとみらいホール 大・小ホール、レセプションルーム他
講師 : 館長 新井鷗子、石川美子(レセプションistマネージャー)、井上誠剛(外部講師)
参加者数: 3 名(ハーモニーホールふくい 事業部長、公演担当、レセプションist担当)

【実践】「ミュージック・イン・ザ・ダーク®」横浜公演(第 8 回)

「ミュージック・イン・ザ・ダーク®」福井公演の事業担当職員と、表方担当職員が、横浜公演にて、リハーサルから当日のお客様対応までを実地で体験し、実践的に公演に必要なサポートや制作について学んだ。横浜公演では、福井公演の事業担当者が、舞台上での澤村祐司のアテンドを担当し、福井公演に経験をつなげた。

日時 : 2026年2月5日(木)~7日(土) 5・6日はリハーサル、7日公演
会場 : 横浜みなとみらいホール 小ホール
参加者数: 2 名(ハーモニーホールふくい 公演担当、表方担当)

【実践】「ミュージック・イン・ザ・ダーク®」福井公演(第9回)

横浜公演より規模を小さくし、尺八と箏のみのアンサンブルによる公演を実施。横浜みなとみらいホールからは、全体監修・演出として新井鷗子館長、表方監修として藤井、ステージマネージャー兼照明演出として中村が参加し、一年間の研修の集大成となる公演を実施した。

日時 : 2026年3月14日(土)~15日(日) ※14日はハーサル、15日公演

会場 : ハーモニーホールふくい 小ホール

料金 : 全席指定 一般・車椅子席 3,000円 ※小~大学生:半額

障がい者手帳をお持ちの方:2,500円

障がい者手帳をお持ちの学生:1,000円

障がい者手帳をお持ちの方の介助者:2,500円

出演 : 藤原道山(尺八)

澤村祐司(箏)

曲目 : 公演冒頭レクチャー(ハーモニーホールふくい 事業部長 佐々木玲子)

プログラム本編開始前に司会者が、ホールの舞台の広さと形状について、生の声と手拍子で説明。客席の四隅にはレセプションスタッフが立ち、順番に拍手を出して会場の広さを響きで伝えた。

アメイジンググレイス

中尾都山:鶴の巣籠

八橋検校:六段の調

宮城道雄:春の海

日本の四季より「さくらさくら」「荒城の月」

藤原道山:空

宮城道雄:ロンドンの夜の雨

澤村祐司:たれかおもはむ(詩:島崎藤村「若菜集」より)

藤原道山:花宴

主催 : 福井県文化振興事業団

協賛 : 増田喜

協力 : 東京藝術大学、福井県視覚障がい者支援ネットワーク 羽二重ねっと

監修 : 横浜みなとみらいホール(横浜市芸術文化振興財団)

特別協賛:村井勇松基金

公演入場者数:373名

・障がい者手帳等をお持ちの方 31名